

産業TREND

地方の未来にワクワクを

社会システム変革

持続可能な暮らしの実現のためには、個人の意識を変えるだけでは不十分である。もったいないと思っても捨てざるを得ないことがある。個人が最適な選択をしても、その集合としての全体が最適になるかどうかは分からない。そのため、社会の仕組みを変えるイノベーションシステムが必要である。本稿では、未利用資源の活用を進める中で社会変革をどのように起こすことができるのか可能性を探りたい。

最近、描かれる未来像を見てもワクワクしない。技術を使い、利便性を求めるものばかりで、価値観が単一化している。都市部の人も地方の人も類似の価値観を持つようになっている。テレビやインターネットなど入手情報が類似しているからだろうか。90歳前後の方はその地域の最も美しいところを尋ねると、5月ごろ、一雨一雨とに芽吹いて、山の色が移り変わる光景が最も美しいと教えてくれる。このような利便性を求めること以外の価値観が

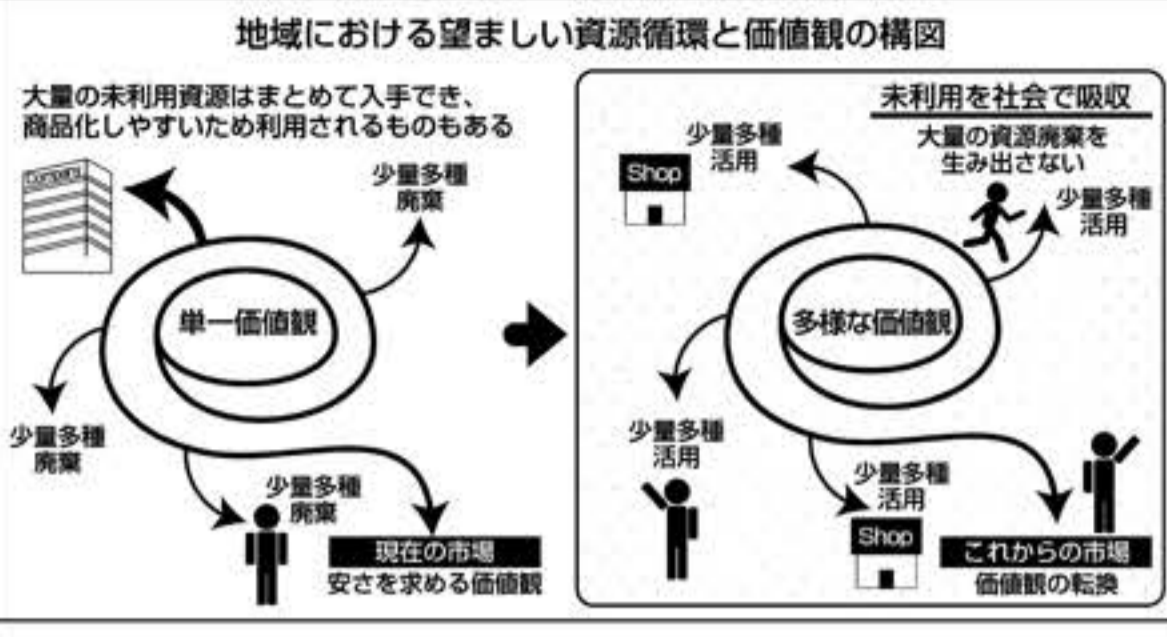
未利用資源を活用する 美食地政学



都市部の企業人と地方の漁業従事者との会話が弾む

都市部の企業人と地方の漁業従事者との会話が弾む。都市部の企業人は、地方の漁業従事者から、新鮮な食材や加工が難しい食材が廃棄されてしまう。これら未利用資源を生み出して

消費を促している。単一の価値観が広がる社会では、典型的な食材しか食べようがないため、少量多量の食材やこれまで地域であまり自給しなかった食材は売れずに未利用になつてしまふ。また、おいしさより効率を重視するため、おいしいが少量多量の食材や加工が難しい食材が廃棄されてしまふ。これら未利用資源を生み出して



多様な価値観に応える小商流

東京都市大学環境学部 環境経営システム学教授 古川柳蔵



理想像から逆算の思考を

理想像から逆算の思考を

持続可能な暮らしの実現

しまつ原因の一つである。未利用資源を活用し、地方で自然資源を採取して都市部へ高価格で販売するビジネスは一時的には成功に見える。しかし、極端に一部の人の社会的評価が高まりもうけが偏ることにより、やがて、地域の中でねたみが生まれ、コミュニティが崩壊してしまふ。個人が最適な選択をしても地方全体の暮らしが豊かになるとは限らない。市場原理を地方のコミュニティの中にそのまま持ち込んだことによる失敗である。私たちは短期的な成功を追いかけながら、地方の暮らしにとって大切なものを何かに失っているのだ。



コーディネーターが都市部と地方をつなげてプロジェクトを進める

味で使われている。採取したものの、利用されずに廃棄されるものもあれば、利用されるものもある。未利用資源を生かすには、地域の中で探索し、それを販売して大もうけすることを目指すと失敗する。その地域の人々の中で、ありたい暮らしの姿を共有し、多様な価値観を認め合い、未利用資源の活用を進めることが重要なのだ。さらにその価値観を都市部の消費者にも共有し、未利用資源を周囲で吸収しながら循環型社会への社会変革を進めることができないだろうか。これが国のプロジェクト「美食地政学」に基づくグリーンジョブマーケット（JST）の醸成共創拠点。

持続可能な社会に向けて社会システムの変革を起こすために何が必要か。「美食地政学に基づくグリーンジョブマーケットの醸成共創拠点」副プロジェクトリーダーの東北大学大学院特任助教の三橋正枝氏に話を聞いた。一この美食地政学プロジェクトを進めるに至った原点は何ですか。「企業で仕事をしていた頃、イノベーションという言葉をよく耳にしました。彼らは新しい商品やサービスを生み出し、ヒットさせることがイノベーションだと思っていました。しかし、それだけでは何か足りないと感じていました。そして、そこに持続可能という概念がないことに気付いたのです。地球環境や社会の全体最適まで考えなければ、これからの未来に必要なイノベーションではないと思うのです。一どのようにすれば、社会を最適化するイノベーションを起こせると思いますか。「以前、地震で津波が発生した時に、都市部に『たかが50分の津波で大騒ぎするのはどうかな』と発言した人がいました。でも、沿岸部の漁業従事者にとっては設備に大きな被害が出る可能性があることなのです。この時、調理するなどのグリーンジョブを生み出し、それを担う人材を育成することも重要である。



東北大学大学院特任助教 三橋正枝氏

コーディネーター育成重要に

都市部の視点だけで起こすイノベーションでは、全体最適された持続可能な社会への変革にはつながらないと思います。今起きている自然環境の異変をいち早く察知するのは地方です。『アサリが食べられなくなった』『モズクが少なくなった』といった環境劣化を察知できるのは地方なのです。社会全体を最適化するためには、地方で働いている人の動きや、感じたことに、都市部の人が耳を傾けるシステムとして次世代に伝えていくのです。語っているだけでは伝わりません。そのために、この暮らし方が当たり前だと思えるような価値観に転換する教育システムと、地方と都市部の両方を理解し、人々の暮らしと自然との関係を、どこで折り合いをつけるかを見極めて判断する人、つまり、全体最適を導けるコーディネーター育成のプラットフォーム（基盤）の構築を進めたいと思っています」（聞き手・古川教授）